国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

「東千労（国労内右翼民同、青友会＝本吉、東グループ）」の右翼分裂攻撃をうちくだき

闘う国鉄の仲間は1225国鉄労働者千葉交流集会

18時～，(於)船橋勤労会館

日刊 動労千葉

86. 12. 23

No. 2438

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）

（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二22）七二〇七

いま、国労内の旧主流派を中心とした右からの脱落・分裂の策動が各職場でかけられている。千葉においても、十一月国労千葉旧執行部が「東日本千葉鉄労」なるものをデッチあげ、自らの雇用を守るのではなく「組合幹部」の延命が目的という事実をみなければならない。

労働者を守るのではなく「組合幹部」の延命が目的

国労内の右翼青友会分子や右派民同が国労より脱落・分裂そして「東日本千葉鉄労」をデッチあげた。それが「総評・社会党の路線に従ったまで」、などを口実に行われている。第一次労使共同宣言を結び「雇用を守るため合理化に協力」を誓ったのだ。それが「雇用を守る」と称して会社を守り、国を守っていく。その過程で労働運動を死滅させ、労働者を売り渡して、労働運動を右へ右へと導いて労働運動を死滅さしていく。そこにおいても自分達だけは生き残る。彼らが国労脱退直前まで批判してやまなかった動労・松崎、鉄労・志摩らと何ひとつ変わりやしない。

このような指導部が中曽根・杉浦の手先となっているものだから「サンケイ新聞」の〝黒字経営の私鉄と労働条件が同じでいいのか〟〝大赤字をつくった国鉄マンが私鉄並みの働きで新事業体を運営できるか〟〝私鉄より厳しい条件から出発させよ〟などという怒りなしでは見ることのできない記事となるのだ。

そして、国鉄当局は国労の旧主流派を使って、いま必死になってデマをねつ造し、組合員に不安をあおり、国労や動労千葉から脱退させる攻撃を本格的に開始しようとしている。

このような裏切り者によって、まさに職場は「去るも地獄、残るも地獄」の状態となっている。九〇名もの仲間を死に追いやった者は誰か。死をもって抗議する労働者の怒りと無念をいまこそ闘いで晴らさなければならない。仲間を信じ、裏切り者を許さず闘いぬこう。

東日本千葉鉄道労組

合理化に積極協力

千鉄局と労使共同宣言

国労千葉地本から脱退し、新川崎駅で旗開きして結成された「東日本千葉鉄道労組」（本吉好美委員長、約千五百人）は二十六日午前、千葉鉄道管理局（保志勝一局長）と労使共同宣言と雇用安定協約を締結した。

「第一次労使共同宣言」の行使を自粛する

「第一次労使共同宣言」を踏まえ新会社で」としている。

この宣言については、労使が合理化に協力することで一致、としている。

また、これらの宣言内容を具体化するため双方の間で「国鉄改革推進労使会議」を設置、ルールにのっとった話し合いの場にしていくとしている。

労使共同宣言の行き着く先は

【労使協定に調印、握手する草木・千鉄局長（右）と本吉委員長】

61.11.27 毎日（地方）

スト自粛宣言まで

民営化後の争議自粛を明記した共同宣言に労使が調印した。国労に反発する七組合の国鉄改革労組協議会が強く望んだから、という。

そこで思い出されるのが戦前の「罷業絶滅宣言」だ。日華事変が起きて間もない昭和十二年秋、全日本労働総同盟（全総）は「事変中の労資紛争を挙げて平和と道義の手段に訴へて解決し」と宣言、国防献金も決めた。むろん当時と戦後を同一視できないけれど、権利を自主的に返上してゆく姿勢の共通性に胸騒ぎをおぼえる。

これら一連の動きに、総評中核の国労切りくずしへの熱意も読みとれる。

その大会で全施労の上部団体、新産別の富田弘隆書記長は再考を促した。「ストをする、しないは、労使で宣言するようなことではない。いじめは、おん念を拡大再生産するだけだ」。だが、会場の雰囲気は、馬耳東風の感があった。

他方、集中攻撃を受けて月に一万人もの大量脱退が続く国労

朝日新聞